

## 論文の内容の要旨

氏名：刘 丽 凤

博士の専門分野の名称：博士（教育学）

論文題名：

中国農村中学校の中退に関する社会学的研究——教育と社会的不平等の再生産過程に注目して——

### ■序章

中国農村部では義務教育段階であるにもかかわらず、中学校の中退率の高さ注目されている。既存研究によれば、農村中学校の生徒（以下、農村中学生）の中退率が3.78%～54.05%と広がっており、最も高い農村部では60.82%にも達していた。農村中学生の中退に関する既存研究では、都市部への出稼ぎ風潮の浸透による「読書無用論」や「厭学」の隆盛、施設設備の不足や教師集団の質などの農村部の学校にかかわる諸課題が中退理由として指摘されてきた。しかし、それらの研究は総じて中退を「個人や家庭の選択／自己責任」とみなす傾向があり、農村中学生の中退過程に学校内部、とりわけ教師がどのように関わっているのかについて十分に検討してきたとは言い難い。

そのため、本論文では「中国の農村中学校でなぜ中退現象が多く生じているのか」という問いを出発点に、中退者が生み出される学校の内部過程をエスノグラフィーの手法を用いて検討した。具体的な検討課題は以下の2つである。第1に、農村中学生はどのような学校生活を送っているか、また中退に至るプロセスや中退後のライフコースはどのようなものか（第一部：第1章～第4章）。第2に、農村中学校の教室のなかの生徒、とりわけ学業成績が芳しくなく、問題行動を起こしがちな「できない生徒」に対して、教師はどのように処遇しており、そうした教師の処遇方法にいかなる理論が内在しているのか（第二部：第5章～第7章）。以下では、各章の分析結果を示したうえで、本研究で得られた知見をまとめる。

### ■第1章

第1章では、農村中学校の中退者とその親を対象に行ったインタビュー調査をもとに、中退理由と親の学校教育観について検討した。分析の結果、対象者たちから学業成績の低さによる高校進学への難しさ、教師関係、生徒関係が中退理由として語られた。そのうえ、親たちは概して中退に反対の意見を示し、子どもに「脱三農」（脱農村・農民・農業）を強く期待していた。その一方、子どもの学業達成が低く高校進学が困難な場合、親たちの学校教育観が変容し、子どもの中退を抑制できないものとなっていた。その背景には、親たちの学歴が低く、子どもに対して実質的な教育サポートを行うことが困難であると同時に、学校における子どものパフォーマンスを子ども自身に原因を求めることが関係していた。

### ■第2章

第1章では、農村中学生の中退に学業成績及び教師・生徒関係など、学校内部にかかわる諸要因の重要性が示された。では、現在在学している農村中学生からも同様な傾向が見出されるのだろうか。第2章では質問紙調査の結果に基づき、農村中学生の進路希望（進学希望／中退意識）の規定要因について検討した。検討した結果、生徒の出身階層（父親学歴・職業、家庭の社会経済的地位）や性別等を統制しても、学業成績や教師（担任）との関係性が中学生の中退意識と関連していることが明らかとなった。すなわち、農村中学生の中退において、学校内部の諸要因が無視できないほど重要であることが示唆された。

### ■第3章

第1・2章の結論から、学業成績が低くかつ教師との関係が良くない生徒ほど、中退リスクが高いことが示された。そこで第3章では、学業成績が低く、学校文化から逸脱的な男子中学生（＝「後列席」の男子中学生）に焦点を当て、彼らがどのような学校生活を送っているのかについて考察した。「進学至上主義」の学校文化が浸透されるなか、彼らは学習に取り組むことなく、学校生活の意味づけを「健やかな成長」（中国語：養身体）や「時間つぶし」（中国語：混）と定義しなおし、寝る・ぼーっとする・音楽を聴くなどして時間を過ごしていた。そのうえ、クラス内では「力強さの誇示」や「笑いを取る」こと、教師に対して「選択的抵抗」を示すなどの適応戦略を用いて、学校の中に居場所を作っていた。しかし、受験ムードが

濃厚な最終学年になるとそれらの適応戦略が効果を持てなくなり、かれらは一斉に学校を中退していった。

#### ■第4章

では、農村中学校を中退した男子中学生たちは、その後どのようなライフコースを歩むことになるのか。第4章では、かれらの追跡調査からその点を検討した。かれらが中退したのち、農村部を出て、知人・親戚などの親密圏内のネットワークを活用しながら「出稼ぎに行く」「職業訓練を受ける」「見習い弟子として働く」などの進路を辿っていた。しかし、排除的な学校生活を送ってきた彼らは、再び職業訓練学校を中退し、劣悪な労働環境に置かれるなど不安定な状況に置かれていた。このようにして、農村中学校の中退者は、中国農村部／都市部に横たわる社会的不平等の再生産構造に組み込まれていくのだが、限られた人的資本や社会関係資本のなかで、かれらの職業教育や就労をどのように保障すべきかの課題を提示した。

#### ■第5章

第一部での検討から、農村中学生の中退における教師の影響が示唆されたが、第5章では農村部の教師の指導文化と、そこで用いられるストラテジーについて検討した。検討の結果、以下の点が明らかとなった。第一に、教師は教室の中の生徒を能力・階層・努力に基づいてカテゴライズしたうえ、進学可能性の高い生徒を前方席に座らせ、そうでない生徒(=「できない生徒」)を後方席に座らせるなど、目に見える対処を行うことで生徒に優劣をつけていた。とりわけ、「できない生徒」に対して教室や学校から排除しようとし、学校にいることを否定的に捉えていた。第二に、上記のような教師の指導文化の背景には、「重点高校に進学できた生徒数によって教師評価がなされる」という文脈があった。そのような制度的文脈のなかで、農村中学校の教師たちは自らのサバイバル・ストラテジーとして、「できない生徒」を排除していた。

#### ■第6章

第5章で明らかにした農村中学校の教師の指導文化は、農村部に固有的なものだろうか。教育資源が比較的集中している都市部の中学校教師の指導文化とどのように異なるのか。第6章では、比較の手法を用いて上記の問いを検討した。都市部の中学校教師は、とくに生徒の学習意欲を重視し、日常的に生徒たちの学習意欲を高めようとすると同時に、「できない生徒」を教室内に位置づけようとしていた。「できない生徒」に周辺的な役割を与え、学習よりも秩序の順守を求める点において農村中学校と共通する部分も見られたが、かれらを教室や学校からあからさまに排除する動きは見られなかった。このような教師の指導文化の違いが生じる背景には、都市中学校における「できない生徒」の少なさや、生徒の学業成績や進学可能性を過度に教師評価に用いられていないことが指摘できる。

#### ■第7章

「逆トーナメント型指導」のもと、最も「しんどい」生徒に指導を集中させるという日本の中学校教師の指導文化は、中国農村中学校における教師の指導文化にとって重要となるため、第7章では両者を比較検討した。日本の中学校教師は、教室内の生徒間の差異が顕在化しないように配慮しつつ、「できない生徒」に対してフォーマル場面とインフォーマル場面にわたって指導やサポートをしていただけでなく、生徒間の協働的な関係の構築を重視し、役割付与もグループや班を単位に行われていた。このような教師の指導文化は教師個人が編み出されたものというよりも、「問題を抱える子を中心に」という学校の組織的な教育目標に基づくものであった。そのため、たとえ教職歴の短い教師でも同様な教育実践を行っていた。このように、日本と中国の教師は「できない生徒」に対して対極的な処遇を見せていただけでなく、日本の中学校では学校の組織的な教育目標に基づき、教師間の協働関係が強調されるのに対して、中国農村中学校では教師は基本的に個人ベースで教育活動を行っていた。

#### ■終章

終章では本論文で得られた知見をまとめ、本論文の課題を提示した。

第1に、中国の二元化社会を背景に農村部の子どもとその親たちは、「脱三農」や「学業達成を通じた地位達成」に強く期待していたため、学校文化に親和的な価値観を形成していた。しかし、「できない生徒」たちは、農作業への拒否からすぐに中退せず、中学校生活の意味づけを「進学」から「健やかな成長」に

変えながら、学業から離脱した学校生活を送っていた。しかし、受験ムードが濃厚な最終学年になると中退し、出稼ぎ・職業教育を受ける・弟子入りして働くなどの進路を辿っていたが、いずれも不安定な状況に置かれていた。

第2に、中国農村中学校の教師は「できない生徒」を教室や学校から排除し、かれらが学校にいること自体を否定的に捉えていた。その背景には、「進学至上主義」が浸透する学校文化のなか、教師たちは高校進学者数（特に重点高校）を用いて評価されるという、中国農村中学校における教師評価の文脈が関係していた。教師たちは自らのサバイバル・ストラテジーとして「できない生徒」を排除していたのである。

本論文の結果から、農村中学生の学校中退に教師が深く関わっていることが明らかとなり、中退者研究がもっと学校の内部過程に注目すべきことが示唆された。そのうえ、中国社会における不平等の再生産はすでに義務教育段階で始まっており、農村部の子どもたちは学校教育を通じて社会的に劣位な状況に組み込まれていることを実証的に検討した。しかし、本論文にはいくつかの課題が残されている。例えば、本論文では学校内部、とりわけ教師の指導文化に焦点を当てて考察してきたが、農村部における後期中等教育の普及状況や労働市場の問題などのマクロな状況も無視できない。これらの点については、今後の課題としたい。